
雨の放課後

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の放課後

【Nコード】

N5913L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

冷たい雨が降る11月。天気予報が外れ、傘を持ってこなかった哀は、放課後、下駄箱で雨降る空を恨めしそうな顔で見上げていた。いつもよりちよっとついていない。そんな時間が始まるはずだった。彼に会うまでは。

Candlelight閉鎖により移行作品+2005年度光哀の日参加作品。コナン小説リング時代にも書いたリメイクのリメイクのリメイク（笑）作品でもあります（笑）。光哀の話なので、コナ

ンがあまりいい風に扱われてないのは目を瞑ってください（笑）。
ていうかコナンギャグ要素（笑）？いつもいい思いしてるものね・
・（笑）

前編（前書き）

ちなみに、これ、新×志（哀）??な『雨と老女と花と私』と最初
は似たカンジになってますが、パラレルでも何でもありません。設
定が似ただけです。ていうか考えることが同じです。もとはといえ
ば、新志の『雨の放課後』バージョンにしたかったのにならなかつ
たのが（笑）あの作品です。

あ、気になる人は『雨と老女と花と私』をぜひ。・・・更新停止中
ですが（ひー）。

前編

11月の雨はとても冷たく、天気予報は一日中晴れだといったのに、給食を終えたあたりから急に表情を変えてきて。

曇天の空から、しとしとと静かに降りだしたその音を聞き、灰原哀は俄かに顔を曇らせた。

今までどうにか持っていたようだが、とうとう限界を迎えたようだ。彼女は小さく溜息をついた。

「さて、どうしたものかしらね」

彼女は今、傘がない。博士に電話をしようにも、博士は近く行われる学会の発表に手一杯なようで、その邪魔は決してしたくない。

小学校の下駄箱は埃くさく、風邪の引き始めの彼女にあまり長くない場所。ぴゅう、と北風がいたずらに彼女を襲い、哀は思わずくしゅん、とくしゃみをした。その瞬間、温かいパーカーがふわり彼女の肩にかぶさる。

「・・・え？」

哀は驚いて、その服を掛けてくれた相手を見ようと振り返った。そこには頬のそばかすがトレードマークの、小学1年生にしては背が高く、利発そうな少年が立っていた。そう、彼の名は。

「円谷君・・・」

彼は今までそれを着ていたのか、今では薄地の長袖シャツ一枚で見るからに寒そうだった。

「だ、大丈夫ですか？」

「・・・大丈夫って、あなたのほうが・・・」

「平気ですよ、これくら・・・ひっ・・・ひっくしゅん！」

派手なくしゃみをひとつして、彼はばつの悪そうな顔をして、そうして恥ずかしそうに笑った。

「ちよっ・・・」

「はは・・・」

「もう。なにやってるのよ。あなたまで風邪ひいたらどうするの？」

哀は呆れたような顔で、肩にかかったパーカーを返そうとすると、光彦はあわててそれを押し返す。

「いいですって！僕に恥をかかせる気ですかっ！男に二言はないんですからっ！」

「バカね、そんな恥とか言ってる場合じゃないでしょ？そんなところで意固地になっても」

「意固地じゃないですよっ！だって・・・、灰原さんが寒そうにしているのに、手を拱いて見ているなんて、僕には絶対できませんからっ！灰原さんの代わりに僕が風邪を引けたのなら、それもまた本望ですっ！」

「あら、ありがと・・・」

強く言い切った後で、そう哀にさらりと間髪入れずに言われ、彼は自分が何を言ってしまったのか気づき、みるみるうちに顔を茹蛸のように真っ赤にした。

「あの、その・・・」

地面を見つめ、もじもじしている光彦を見て、哀はぶつと噴出した。

「・・・ありがとう、じゃあ、素直に受け取るわ」

につこり笑って、もう既に自分の手を温めていたそのパーカーにそつと袖を通せば、花のような香りが仄かに香った。これはきつとラベンダーだ。彼の家ではおそらくそのようなお香を焚いているのだろう。

「いい香り・・・」

哀は袖に小鼻をあて、ひくひくと蠢かせた。

「・・・は、灰原さん」

さらに顔を赤くする光彦。哀は彼に優しく笑いかけた。

「・・・とても暖かいわ」

その言葉に、光彦はとても嬉しそうに、そして満足そうに微笑んだ。

「じゃあ、僕はこれで・・・」

そう言いかけて、彼女が傘を持っていないことに気が付いたようで、一瞬躊躇ったように自分の手元にあった傘を見たが、すぐにきりつとした顔になり、それをむりやり彼女に握らせた。

「ちよつ、何？」

彼女が手に握らされたのは青い傘。戸惑ったように哀は光彦を見ると、彼はにっこり笑顔でこう言った。

「それ、使ってください」

「『使って』って……。あなた、傘がなきゃぶ濡れじゃない」「いいですから。……じゃ、僕は急ぎますので、これで」

丁寧に一礼して、彼はあわててしとしと雨の中を駆け足で走りぬける。

手提げかばんを雨よけにして。ばしゃばしゃと水溜りを蹴り、水沫を上げながら。

「ちよつと……。円谷君!？」

哀が大声で呼び止めても、彼は振り向こうとはしなかった。だんだん小さくなる後ろ姿を見つめ、哀は困ったような顔をして、小さく溜息をついた。

「まったくもう……」

けれど、口元には少しの笑顔があつて。

光彦の青い傘を開こうと手をかけたそのとき。

「おい、灰原。傘、持ってたのか？入れてくれよ」

その声に、ハッとして哀は振り返る。江戸川コナンが彼女のちょうど真後ろに立っていた。

「・・・工藤君・・・」

「それにしても、ひどい天気だぜ。天気予報は外れるし・・・。
あーあ。放課後サッカーでもして帰ろうと思ったのになあ」

コナンは大きくため息をついた。そしてあたりまえのように哀が
開いた傘の中に体を入れる。

哀はじつとしばらくそんな彼を見つめていたが、突然、ふっと意
味深な笑みを浮かべた。そして――

「・・・何のつもり？」

ジト目でコナンを一瞥した。

「な、何って・・・。言っただじゃねえか、『入れてくれ』って」

その冷たい視線に戸惑ってコナンの口調が早口になる。そしてそ
の声は彼らしくもなく素っ頓狂だ。

「『はい、どうぞ』だなんて誰も言っていないんだけど」

「・・・だって人が困ってるんだぜ、傘に入れてくれたって・・・
」

「残念だけど、この傘、あなたに入れてあげられるようにはでき
ていないみたい」

さらりと哀はそういうと、彼を残してすたすたと下駄箱を出た。

「・・・は、灰原？おい、ちよっ・・・ちょーまてっ！おい！が
んばればそれ2人入れるじゃねーか！」

「・・・だれががんばるの？」

「それはっ・・・って、おい」

戸惑ったように、後ろで彼の声が聞こえるが、哀はすたすた歩き続ける。が、10メートルほど離れたあと、立ち止まり、足を止めて振り返ると、

「さようなら、また明日」

と、にっこり冷たい笑顔を浮かべたのだった。

校門に向かって歩いている途中、後ろでコナンの、へえーっくしゅん、というかなり派手なくしゃみが聞こえていたが、哀はあえて聞こえないふりをして、颯爽と学校を後にした。

前編（後書き）

そしてコナンくんは風邪を引いて、その後どっくんして工藤くんになるぞ、と。

・・・嘘です（笑）

中編

校門を出て、光彦の貸してくれた傘を差し、いつもの帰り道を辿る。

帝丹小学校の校門を出て、銀杏並木を通って、道路沿いの本屋で寄り道して、パン屋の飼い犬であるコロナの処でいつも道草を食っていたりするのだけだ。

「いないわね・・・」

パン屋の前に着いて、哀は少しだけ息切れしながら言った。少々疲れていた。

早足で来たつもりだった。彼が道草を食わなくてもおいつける計算でいたけれど。きっとまだこの辺りにはいると思っていた。

しかし、逢えると思ったその場所には彼はいなかった。

コロナは哀の姿を見つけると、嬉しそうな表情で尻尾を千切れんばかりにブンブンと振った。その様子に哀は表情を綻ばせると、いつものようにしゃがんでコロナの頭をよしよし、と撫でてやる。

雨で散歩にも連れて行ってもらっていないのだろう、暇をもてあましていたその犬は大好きな彼女の来訪にとっても喜んでるように見えた。

しとしと冷たい雨はときどき傘のガードをすり抜け、哀の頬や緋色の髪、そして首筋にあたる。さすがに11月の雨は冷たくて。芯まで寒さが沁みいるようだった。ブルルと思わず寒さに身震いし、自分にパーカーと傘をくれたあのそばかすの彼のことを考える。

円谷光彦。彼は今、どんなにか薄着なことだろう。

「無理しちゃって・・・」

そんなドラマみたいなことなくていいのに。

雪にはならない雨。コートもまだ早い。それでも、11月の雨は11月の雨。起毛のついたパーカーはとっても温かく。逆にそのパーカーを失い、傘もない今の彼はとっても致命的であると思う。

「ホント、大丈夫かしら」

哀はコロナの頭を撫でる手を止めて、心配そうに呟いた。ちょうどそのとき。

「ひ、ひ、ひえ〜つくしゅん！」

聞き覚えのあるその高い子供の声と、その、コントのような派手なくしゃみがすぐ近くで聞こえた。

「え・・・？」

思わずその方向を振り返ると、そこには鼻を擦っている光彦の姿があつて。頭に手提げかばんを雨よけにしたまま、そこに立ち尽くしている。

どうやら信号待ちをしているようだ。

「円谷くん・・・」

哀は光彦の姿を見つけ、ほっと息をつく、コロナの頭を再び軽く撫でてから、彼の許へと歩き出した。コロナは哀が自分のもとを離れるのをすぐに察して、くうん、と色っぽい声を出す。そんな彼女に、哀は口元に指を当て、「しっ」とウインクをして見せると、またゆっくりと彼のもとに近づいた。

まだ、信号は赤のまま。

哀はそろそろと彼の後ろまで行くと、そつと彼の頭上で傘を差し掛けてやった。

「え？」

すぐに光彦は振り返り彼女の姿を確かめると、その表情はみるみる驚きの色に変わっていった。

「あれ？灰原さん？え？あれ？どうして、ここに・・・」

慌てふためく彼の様子に哀は大きく溜息をつき、自分より7、8センチは高い彼を上目遣いで軽く睨んだ。

「それは私が聞きたいわ。こんなところであなた、何をやっているの？確か急ぎの用事だったんじゃないかったのかしら？」

「えと・・・その・・・」

口をもごもごさせ、光彦は俯いてしまう。哀は、その慌てように思わず苦笑してしまう。

言わなくても答えは出ているのだ。未だもじもじ、兩人差し指をくるくる回しているの、哀は呆れてちよつとこつち来なさい、と彼の服のすそを掴み理髪店の軒下まで彼をすたすたと連れて行った。その様子は少しばかり強引だということが哀自身にもわかっていたけれど。彼のやっていることを見てきた今になって、自分の感情全てがそつさせた。

「ななな、何ですか??？」

「いいから黙ってついて来ればいいの」

「は、はい・・・」

躊躇いながらも、されるがままになる光彦。ただならぬ様子に物怖じしている様子で。思わず眉根を寄せた。そんなに自分は怖い顔をしているだろうか。

「別に食べやしないわよ。そんなに怖い顔してる？」

「は、はい。何だか、僕しちゃマズいことしちゃいましたかつ」

「そうね、したんじゃない？」

「えっ・・・！？」

言葉を失い、顔を青くする光彦に、哀はただ笑った。軒下まで辿り着くと、哀は無理やり彼に先ほどまで使っていた彼の傘を握らせる。彼も最初から彼女に持たせるつもりはなかったようで、すぐにそれを受け取った。そして驚いた表情のまま、もう一度さっきの言葉をたずねる。

「どうして、ここに・・・」

2度目の同じ質問に、哀はちろりと光彦の目を見て、それからまた別の方向に視線を送った。

「バカね、あなたを探しにきたに決まってるじゃない。」

「え？」

「あんなことされちゃ、貴方を放っておくことなんてできないってこと。貴方は自分が全て私の代わりに風邪を引くなんていったけど、もしそれで本当に貴方に風邪を引かれたら、私はどうするの？せめて一緒に帰ろうっていう手は考えなかったわけ??」

「・・・ごめんなさい」

呆れた様子の哀の強い口調に、光彦は思わずしゅんと頂垂れた。そんな彼に対して、口をへの字型に曲げていた哀だったが、ふう、と小さく溜息をついて。

「・・・はい」

目の前に出されたのは、ふわふわのタオル。晴れ空のようなスライブルーの色が彼に手渡される。

「え？」

「風邪、引いてしまうわ。早くそれで拭きなさい」

「え、でも、それは・・・」

「受け取って。そうしなければ私がここに来た意味がないでしょ」

さらりといいながら、そっと彼の手の上に確実に握らせた。ぎゅ、と両方の手で彼の手を包み込むように。

伝わる、ぬくもり。

彼の手は11月の雨のせいか、とっても凍えて、冷たかった。

びっくりした。こんなに冷たいと思わなかったから。

さっきのくしゃみ。本気で風邪なんて引いていないだろうか。

自分のせいで熱なんて出しやしないだろうか。

心配になって視線を彼の手から顔へと移すと、光彦もまたちらり、ちらり、自分を見つめて。そうして交互に、彼自身の手元を見つめている。ぎよつとして哀は訊ねた。

「何・・・？」

「いや、拭いて、くれないのかなぁ・・・なん・・・あつ、はい！ありがとうございます！！！！」

光彦は慌てたように受け取ったタオルを広げ、一気に体を拭きあげたのは、きつと自分の顔がすごく怖い顔をしていたんだろうな、と哀は後々になって考えた。

後編

「やみませんね、雨」

哀のタオルのおかげでさっぱりとした光彦は、その言葉とは裏腹に何故か嬉しそうな顔で厚い雲に覆われている灰色の空を見上げた。そんな彼に対して、哀は思わず首を傾げてしまう。

「・・・何がそんなに嬉しいの？」

一瞬、彼はぼんやりと哀を見つめて、それから小さく照れくさそうに笑った。

「それは・・・雨が降ってるおかげで、こつやつて長く灰原さんを独占できるから。・・・いつも君の隣にはコナンくんがいますから」

彼の横顔には諦めの色が見えていた。

「円谷君・・・」

「二人、お似合いですもんね。・・・いくら頑張ったって、僕には彼を追いつくことも、追い越すこともできません。だから・・・せめてこのときぐらい君を独占したいんです。できれば、ずーっと雨が降り続いていてほしいなあ、なんて正直言って、今でも思ってます・・・。そんな僕はズルいですか？」

光彦の目は哀の瞳だけを捕らえていた。

真剣な瞳、まっすぐ自分だけを映している瞳。顔の頬は赤く染まっ

それから口をきゅっと結んで、拳を握り締めて俯いた。
そんな光彦の様子をただじっと驚いた様子で見つめていた哀では
あつたが。

「・・・帰るわよ」

突然彼女がいつものその笑みを浮かべると、彼に言った。少しぶ
つきらばうに聞こえる言葉と、そしてクールな微笑。そして雨に濡
れるのも構わずに光彦を置いて、さつさと道を歩き出す。

しとしと降る雨は、彼女の緋色のウェーブがかった髪を美しく濡
らしていく。

「・・・はい」

しょんぼり頂垂れた彼の様子はまるで叱られた子犬のよう。そん
な彼に対して、哀は心底溜息をついた。

「何やってるの、早く一緒に家に帰りましょ。博士が待ってる」
「・・・はあ？『一緒に』って」

きよとん、とした表情で、彼はまじまじと哀を見つめた。意味が
わからない、そう表情は語っていた。言葉が足りなかったかな、と
哀は反省する。顔には出さないが。その代わりに。

「バカね、何もこんなところで雨宿りしなくてもいい、って言っ
てるの。ここにいたら風邪を引くだけだわ。今日はうちに寄りなさい。
家に行けば、彼が作った新作のゲームもあるし、何よりここよ
りずっと暖かいわ」

そう言って優しく彼に笑いかけた。

みるみる彼の顔は、光が射したように華やいでいく。

「じゃ、じゃあ、あの・・・僕は嫌われたわけでも失恋したわけでも・・・」

「失恋？」

「いえ、あの、何でもっ・・・」

しどろもどろになる光彦に、哀は思わずおかしくなって小さくな
って笑った。

「最初からそのつもりだったのよ。パーカーのこともあるし。あ
なたを一人にするわけにはいかなかったから」

それから間を開けずにくしゅん、くしゅん、と小さく2度くし
やみをした。

「だ、大丈夫ですか!？」

光彦はそんな彼女の様子に、あわてて軒下を飛び出し、哀の頭上
にさっと差した。

「ありがとう」

哀は鼻を囁りながら、くすつと微笑んだ。そして、彼に向けて傘
をそつと傾けてやる。

「最初からこうすればよかったのね」

彼女はそう呟いて、自分より少し背の高い彼を見上げた。

雨は相変わらずしとしと降り続いていた。

光彦が自分の家に帰るときに通る道はもうとつくに過ぎていた。

目指すは灰原哀が住む阿笠邸がある、米花町2丁目22番地。

あと何十メートルもすれば辿り着くだろう。あの、目の前にある
曲がり角を曲がれば――。

一つの小さな青い傘の中で光彦と哀は仲良く体を近づけて歩いている。

「僕、灰原さんのうちに一人だけで行くの、初めてです」

顔を始終赤く染めて光彦が言った。近くに哀の顔がずっとあるのがきつと照れくさいのだろう。

それとも彼は、初めて少年探偵団ではなく、『円谷光彦』として行くという体験に、心なしか興奮しているのかもしれない。そんな彼の様子に、哀は少し自嘲的な笑みを浮かべてしまふ。自分への蔑みの笑み。

「・・・はい、ばらさん？」

「え？」

びつくりして哀は彼を見た。心配そうに自分の表情を伺っている光彦。また気がつけば表情に出していたらしい。自分は、自分の気持ちを保つのがヘタだと思った。

「どうしました？すごく顔色が悪いというか・・・何か悩み事ですか？」

「今日の御飯のこと考えてたの」

「違いますっ。・・・そんな顔してない」

いつになく厳しい表情で。
光彦が哀を見つめていた。

「・・・尋問されてるみたいね、私」

違う。

そんな顔をしているわけじゃない。でも、そういいなくなる。

何のつもり？

あなたも、私の心を読もうとしてるの？

彼みたいに。

『本当の』子どもの、クセに。

一瞬めがねの、あの彼の表情が浮かんできた。そして、彼と重なって見える。

目の前の『彼』の顔。

「ごめんなさい、聞かれたくないことでした？」

ふわりと笑って優しく光彦が言った。その言葉に、哀は一瞬耳を疑った。

「え？」

「ちよつと気持ちに進入しすぎましたかね。．．誰にだって秘密はあるものです。そうして悩みも。人に言えない、抱えてしまいがちな思いもあるはずです。．．ただ僕は灰原さんの力になりたかっただけです。灰原さんの心に降っている雨にも傘を差してあげたかっただけです」

一生懸命まつすぐ自分を見つめて光彦が言うものだから、哀はその目をまん丸にした表情でじつと彼を見つめ、そして糸がぷつりと切れたように、ぷつと吹き出して、クスクスと笑った。それに対して光彦は動揺する。

「は、灰原さんっ！？何がおかしいんですかつ」

「詩人ね。かつこいいこと言うじゃない」

「そ、そうですかつ、テレちやいますよお．．．」

言葉どおり耳まで真っ赤にさせて彼は恥ずかしがった。そんな彼に対して、哀はいつのまにか口角を思い切り緩ませていた。そうして、呟く。

「さっきの話。何を私が考えていたのか、知りたい？」

びっくりした様子で、光彦が哀を見た。一瞬、動きを停止して。それから、

「え？ええ、ぜひっ」

大きく頷く。

「さっきのあなたが言ったことを考えてたのよ。雨が降っているおかげで独占できるとかそういうこと」

「え、あ、あの、それは、わ、忘れちゃ、・・・忘れちゃってくださ」

「私も、もしかしたらそんなことを考えていた時期もあったかもしれない、ってそう思ったのよ」

茹蛸ゆでだこのようになっていた光彦の表情が一気にクールダウンし、元の顔色に戻っていく。

動揺しているのだろう。光彦の聞きたい気持ちがすぐにわかる。

「灰原さん、・・・それって」

「でも、そうはならなかった。思う前にその傘は兼用だったのね」
「・・・え？」

「雨が降っても、日傘でも。ずっと傘には私が入れる余地はなかった」

「え、その人、灰原さんが困ってるのに入れてくれなかったんですか！？だからさっきも灰原さん一人でっ。もしかしたらその人って」

ぎよっとする光彦に、哀は苦笑した。

「たとえ話よ、あなたが詩人みたいなことを言うから、私も対抗したくなっただけ」

「え、あ、そうですか」

ほっとしたような、複雑な表情で光彦は一瞬強めた手の力を抜いた。それから、確かめるように聞く。

「で・・・今もその傘に入りたいと思いますか？もし、傘が少し

余裕ができたら」

「そうね、入ろうとは思わないわね。言っただでしょ、最初から傘には人がいるんだから。雨が降っても、雪が降っても晴れの日でもずっと傍にいるのよ、そんな気も起こらないわ。傘に余裕なんてできるはずもないし」

哀はぽつりと呟いた。きつとどこかで大きくくしゃみをしているであろう彼が頭の隅に浮かぶ。

晴れは表の顔。工藤新一の時。雨は裏。江戸川コナン。傘は心。どっちにしたって自分が入るスキマはなかった。

光彦が言った言葉に、かつての自分がもしかしたらそのような言葉を考え、口にしたことがあったかもしれないと思ったのだ。それを光彦はわかっていたのだろうか。

うまく言ったと見えて、全然うまく喋れてなかった。

「じゃあ、やっぱり僕が灰原さんを入れてあげるしかないんですね」

「・・・え？」

「誰にも入れてもらえなかったら、灰原さんずぶぬれじゃないですか」

きょとんと、思わず目の前の光彦を見る。

（何を、言っているの？）

やっぱり話は少しズレているのか。

意味は通じているのだろうか、それとも――

「いつでも僕の傘に入れるように僕は誰もいれませんか。僕も日傘兼用で、君を」

それでも――

「・・・ナマガキ」

「え？」

「何でもない」

哀はプイ、とそつぽを向いた。口元は少し、緩んでいた。

意味は通じていたのか、いなかったのか定かではなかったけれども、どっちでもよかったのだ。

ただ、彼の言葉1つ1つが、今の哀の心の中に染み入っていた。

気がつけば日は少しずつ傾き始めていた。まだ沈むには早いけれども。

2人は未だ、帰路の中。光彦の大きめの傘に、2人で肩を寄せ合って。

ちらりと隣を見れば、相変わらずボイラーのように顔を赤くしている光彦に目を丸くさせ、それから苦笑した。きつと距離が近いため、腕と腕などがぶつかるのが少し恥ずかしいのかもしれない。まだまだ免疫がない、お子ちゃまなのだ。

そんな彼に対して、哀は『円谷くん』と、優しく声を掛けた。「はい」と光彦が答える。

「今日は寒いからポトフがいいかしらね。あなたは何か食べたい？食べたいの言っているのよ。」

あ、その場合、何かしら手伝わってもらうことになるけど」

「え？・・・も、もちろん。お手伝いはしますけど・・・でも・
・・・ゆ、夕食ご馳走になってもいいんですか!？」

彼の顔がさらに輝く。

「ええ。今日、随分あなたには迷惑かけたし・・・」

「迷惑だなんて、そんな・・・」

「それに・・・」

哀はそこで言葉を止めた。怪訝そうに自分を見つめる光彦。

「私を独占したいんでしょう？」

先ほど彼が自分に対してそう言った言葉。

だから、極力サラリと返したつもりだったが、彼の心は釘付け状態の様子で、とろんとした表情になっってしまう。

「独占して、いいんですか・・・」

「・・・今日だけね」

哀はそう言って笑った。

「あ、あ、ありがとうございますっ!!」

光彦はご近所一帯に響くような大きな声で礼を述べた。

雨傘をさしたまま、自転車に乗っていた中年のおばさんが、何かという様子で二人をじろじろ眺めながら通り過ぎる。光彦はその視線に気づくと、再び顔を赤らめた。それからしばらくして誰もいないことを確認してから、光彦はそっと彼女の手を取った。哀はそ

の大胆さに少し驚いて思わず彼を見つめた。

「いい、ですよ」

「・・・ええ、どうぞ？」

その言葉に、光彦の自分を握る手が強まった。

彼の手はコナンのものより少し骨骨していて。背が高い分、痩せているからなのかもしれない。

少し汗ばんだその手は、こっちまで緊張が伝わってくる。隣で、ただ一点を見つめている彼の頬は、とても上気していた。

光彦に手を引かれたまま、哀はゆっくりと家路へと続く道を歩く。緊張しているためか、いつもより口数が少ない様子で。勿論、彼女の性格上、気を聞かせて自分からたくさん話し掛けるということはしなかったのも、二人の間はとても静かだった。

それでも彼女は満足だった。

いつもはこの一本道を一人、何も考えないようにずっと下を向いて歩いてきた。

最近博士だけでなく、自分も解毒剤を作るために躍起になっていて彼と歩いていても落ち着くこともなくいららと罪悪感が重なる一方。こんな自分が何度いやだと思ったか。そのたびに心配してくれるその彼に対しても素直になれなくて。

あなたの所為よ、なんて口に出すわけにはいかなかったけれど。

だから最近、子供たちと別れたあとのこの道は、一人でも、彼とでも。

——いつも、下を向いて歩くものだばかり思っていた。

しかし今、周りを見渡せば、いろいろなものが見えてくる。雨の雫に濡れてキラキラと光る花や緑。

先ほどの自分たちのように、軒下で雨を凌ぐ野良猫の親子。長靴で水溜りの上で飛び跳ねる雨合羽姿の女の子。雨傘がなかったのか、びしょぬれの背広姿で小走りにかけていくサラリーマン……。

穏やかな日常。

在り来たりな生活……。

今、こんなに穏やかな気持ちでいられるのは、この道をのんびりとした視点で周りを見渡すことができるのは、確かに隣で顔を真っ赤にしながら、自分の手をひいて歩く彼のおかげ。

今日一日で優しさ全てを、慈しみ全てを感じる事ができて。
普段見ることのしなかった場所も、穏やかな気持ちで散策することができて。

何より人の温かさをくれて。プロポーズじみた言葉で告白されて。

あ り が と う

小さく呟いたその言葉に、光彦はきょとんとした顔で「なにか言いました？」と振り返った。

そんな彼の顔をみて、哀は大きく頭を振って「なんでもない」と答えた。

それでも尚不思議そうな表情で首を傾げる彼に対して思わずぷっ

と噴出して。

いつもとおんなじだけど、いつもとほんの少し違う。
そんな、雨の放課後——。

後編（後書き）

傘の類な話は加筆修正しました。
ややこしくなっちゃったかな！。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5913/>

雨の放課後

2010年10月12日00時50分発行